

夏目漱石の「幻影の盾」の行に

「一心不乱と云う事を、目に見えぬ怪力をかり、縹渺（ひょうびょう）たる背景の前に写し出そうと考えて、この趣向を得た。これを日本の物語に書き下（おろ）さなかつたのはこの趣向とわが国の風俗が調和すまいと思うたからである。浅学にて古代騎士の状況に通ぜず、従って叙事妥当を欠き、描景真相を失する所が多かるう、読者の誨（おしえ）を待つ。

遠き世の物語である。パロンと名乗るものの城を構え濠（ほり）を環（めぐ）らして、人を屠（ほふ）り天に驕（おご）れる昔に帰れ。今代（きんだい）の話ではない。

何時（いつ）の頃とも知らぬ。只アーサー大王（たいおう）の御代とのみ言い伝えたる世に、ブレトンの一士人がブレトンの一女子に懸想（けそう）した事がある。その頃の恋はあだには出来ぬ。思う人の唇（くちびる）に燃ゆる情けの息を吹く為には、吾（わが）肱（ひじ）をも折らねばならぬ、吾頸（くび）をも挫（くじ）かねばならぬ、時としては吾血潮さえ容赦もなく流さねばならなかつた。懸想されたるブレトンの女は懸想せるブレトンの男に向って云う、君が恋、叶（かな）えんとならば、残りなく円卓の勇士を倒して、われを世に類（たぐ）いなき美しき女と名乗り給え、アーサーの養える名高き鷹（たか）を獲て吾許（もと）に送り届け給えと、男心得たりと腰に帯びたる長き剣（つるぎ）に盟（ちか）えば、天上天下に吾志を妨ぐるものなく、遂（つい）に仙姫（せんき）の援（たすけ）を得て悉（ことごと）く女の言うところを果す。鷹の足を纏（まと）える細き金の鎖の端（はし）に結びつけたる羊皮紙を読めば、三十一カ条の愛に関する法章であった。所謂（いわゆる）「愛の序」の憲法とはこれである。……盾（たて）の話はこの憲法の盛に行われた時代に起った事と思え。」

というのがあります。

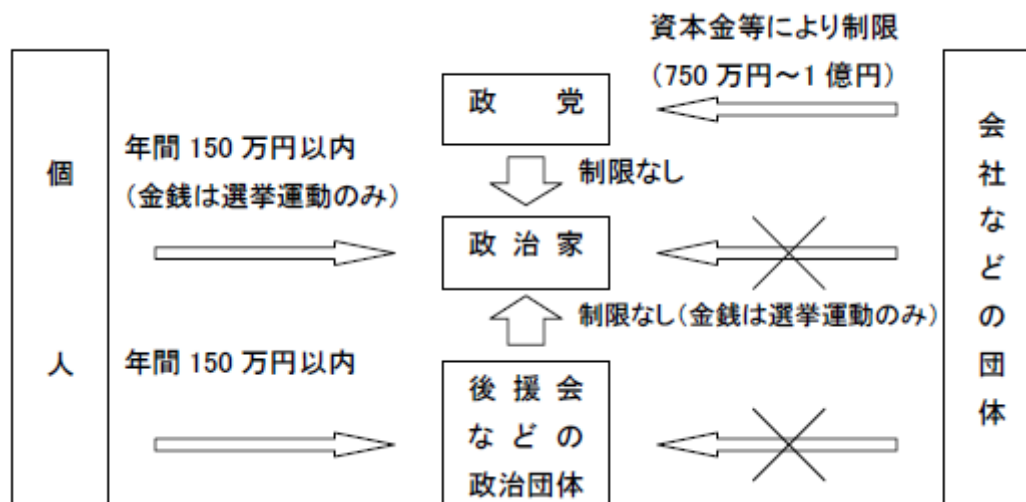
アーサー大王の物語は、イギリスの古代史を、今で言う不倫を「ブレトンの一士人がブレトンの一女子に懸想した」形で抒情詩として描かれたもので、夏目漱石は「アーサー大王の物語が、浅学にて古代騎士の状況に通ぜず、従って叙事妥当を欠き、描景真相を失する所が多かるうわが国において、風俗が調和すまいと思うたから、日本の物語に書き下さなかつた。」そうです。

明治100年をとうに過ぎた現代日本でも、1989年に竹下登の後継者として第75代内閣総理大臣に就任した宇野宗佑首相が、まもなく女性スキャンダルを起して、非難を受され、第15回参議院議員通常選挙で惨敗した後に退陣したり、山崎拓自由民主党副総裁が2003年の第43回衆議院議員総選挙で、総選挙前に女性醜聞問題が取り沙汰されていたことが影響し落選するなど、女性スキャンダルは、夏目漱石の言う「わが国の風俗が調和すまい」ものとして糾弾されています。

女性スキャンダルと同じように「政治と金」のスキャンダルも如何なものでしょうか。西松建設の違法献金事件に端を発する小沢民主党代表の公設第一秘書の逮捕、更に、献金は多数の自民党議員にも及ぶとの報道に対し、内閣官房副長官から、「自民党側は立件できない」と政権サイドから警察権へ介入を意図するような発言が出ています。総選挙前に不況対策など今我国で尤も必要な政策論議を無視したような、与野党の泥仕合に発展しそうな状況になることは、また、わが国の風俗に調和しないことです。

今回の事件は、長年の「金と政治」の問題を、所謂「わが国の風俗が調和すまい」ままに、国会議員の勝手・都合によって、制定された政治資金規正法にも問題があると思われる。国民の税金から政党助成金を受け取りながら、企業からの利益誘導にもとれる献金を許し、警察というレフリーの解釈によって如何様にも取り調べの対象となる現在の政治資金規正法、改正の必要性は法律成立当初から言われていました。

今回の捜査、与野党から色々言われています。しかし、このまもうやむやにすることは、国民は許しません。警察は「一心不乱と云う事を、目に見えぬ怪力をかり、縹渺たる背景の前に写し出そうと考えて、この趣向を得た。」ならば、これを「日本の社会に書き下さなかったのはこの趣向とわが国の政治風土が調和すまいと思うたから」と途中で終結せず、また、「浅学にて政治と金の状況に通ぜず、従って政治活動に対する理解を欠き、真相を失する所が多かろう」と国民を馬鹿にせずに、国民が与野党政治家に対し、公正な「Yes or No」の判断ができる結果を出して欲しいと思います。



< 夏目漱石 (1867-1916) >

小説家、評論家、英文学者。俳人（俳号は愚陀仏）。本名、金之助。江戸の牛込馬場下横町（現在の東京都新宿区喜久井町）生まれ。森鷗外と並ぶ明治・大正時代の文豪。

大学時代に正岡子規と出会い、俳句を学ぶ。帝国大学（後の東京帝国大学）英文科卒業後、松山中学などの教師を務めた後、イギリスへ留学。

帰国後東大講師を勤めながら、『吾輩は猫である』を雑誌「ホトトギス」に発表。これが



評判になり『坊つちやん』『倫敦塔』などを書く。その後朝日新聞社に入社し、『虞美人草』『三四郎』などを掲載。当初は余裕派と呼ばれた。

その他『行人』『こゝろ』『硝子戸の中』『明暗』など。

#### < 政治資金規正法 >

第1章 総則、第2章 政治団体の届出等、第3章 公職の候補者に係る資金管理団体の届出等、第4章 報告書の公開、第5章 寄附等に関する制限、第6章 罰則、第7章 補則と附則からなり、政治団体に対して設立の届出と政治資金収支報告書の提出義務を課して政治資金の流れを明らかにするとともに、政治活動に関する寄附（政治献金）や政治資金パーティーの制限、株式などによる投機的運用の禁止など政治資金の取り扱いを直接的に規制し、違反した場合には罰則なども課せられる。

1975年、全面的な改正が行われ、政治活動に関する寄附の制限が導入されるとともに、政治団体の収支公開が強化された。

1992年、政治資金パーティーに関する規制、政治団体の資産公開、政治資金の運用の制限などが新設された。

1994年、選挙制度改革・政党助成制度の導入と軌を一にして、企業・団体からの寄附の対象を政党（政党支部を含む）、政治資金団体、新設された資金管理団体に限定。

1999年、資金管理団体に対する企業・団体からの寄附が禁止された。

2005年、政治資金団体に関する寄附の出入りについては原則銀行や郵便振込み等で行うことが義務づけられた。また、政党及び政治資金団体以外の政治団体間の寄附の上限（年間5000万円まで）が設けられた（それまでは無制限）。

2007年、事務所費問題を受け、資金管理団体による不動産取得の禁止や資金管理団体の収支報告義務の強化を内容とした改正が行われた。

2008年、国会議員関係政治団体に関して、1円以上の領収書公開や第三者による監査義務付けを柱とした改正法施行（2009年分の収支報告書から適用）。



#### 政治資金



**なるほど! 政治資金** 「政治資金制度」の基本を知ろう!

民主主義の健全な発展のために、政党や政治団体などの政治資金の収支の公開や授受等の規正等を定めた「政治資金規正法」、政党に対する国からの助成を定めた「政党助成法」があります。

**政治資金制度**  
政党・政治団体の収支報告制度、政治活動に関する寄附の制限など。

**政党助成制度**  
政党を助成することで民主政治の発展に寄与する制度です。

**政治資金収支報告書**  
**政党交付金使途等報告書**  
総務省に提出された報告書の閲覧、報告書の要旨など。

（詳細はこちら [http://www.soumu.go.jp/senkyo/seiji\\_s/index.html](http://www.soumu.go.jp/senkyo/seiji_s/index.html)）

### 春秋：「不公正な権力行使？」(3/5)

河井信太郎という鬼検事がいた。戦後史に残る数々の汚職事件を、ときには上司との衝突も恐れず徹底追及したという。不偏不党、厳正公平な検察権の行使。退官後に著した「特捜検事ノート」には、この言葉が繰り返し登場する。

「事実と証拠があるのに、ある政党にマイナスになるからといって必要な捜査を手控えるなど言語道断」というのも河井節だ。そういう精神は今も検察に脈々と受け継がれている。違法献金を受け取った疑いで小沢一郎民主党代表の秘書を逮捕したのも、特別なことではなく「必要な捜査」のひとつに違いない。

とはいえ、世間は検察の思惑を押し量ってかまびすしい。何より当の小沢氏が「不公正な権力行使だ」と猛反撃するありさまだ。たしかに事件はカネの出所についての認識がカギだから判断が難しい。同じように献金を受け取ったというほかの政治家側は「本当の出所を知らなかった」で済まされるのか、どうか。

政局を一変させかねない事件だけに、捜査が中途半端に終わったり、証拠が弱かったりすれば検察も大きな痛手を受けてしまう。ここはひたすら「必要な捜査」を積み重ねることだ。鬼検事の語録には「事案の真相を明らかにするために徹頭徹尾奉仕すべきだ」との言葉がある。それが検察官の「生命」だという。

<河井信太郎(1913-1982)>

検事。東京地検特捜部生みの親。愛知県蒲都市出身。中央大法科卒。

昭電疑獄、吹原・森脇事件、田中彰治事件、日通事件、造船疑獄など多くの複雑多岐にわたる知能犯会社事件の捜査・取調べにあたり、「鬼検事」の名を欲しいままにした不世出の捜査検事。多くの特捜検事を育てたことでも知られている。

官吏になるまでの間、海軍経理学校短期現役学生(いわゆる短現組)に選ばれたためエリート。



### 天声人語：「敵が喜ぶ大将」(3/6)

俳優出身の米大統領だったレーガンは才があったとみえ、気の利いた言葉をいくつも残している。「政治家は悪い職業ではない。成功すれば多くの報奨があるし、失敗したらいつでも本が書ける」など、なかなか機知に富んでいる。

本とは、職を退いて書く回顧録のたぐいだらう。その言に従うなら、執筆のペンを手にしかかっていたのが麻生首相だ。支持率は沈み、「麻生おろし」が吹きつづいた。追い落としの急先鋒（きゅうせんぼう）が民主党の小沢代表だった。

それが一夜にして、小沢氏にもペンの用意が必要な事態になった。攻守所を変えるのかと思いきや、「奇妙な均衡」が与野党間にあるらしい。小紙政治面によれば、自民党は問題をかかえる小沢氏に代表を続けてほしいのだという。

同じように民主党も、不人気な麻生氏を相手に選挙に臨みたいそうだ。互いのマイナスイメージへの期待だらう。天王山を控えて、敵が喜ぶ大将とは情けない。野球の貧打戦を見るような、お寒い政治の光景である。

「政治の幅はつねに生活の幅より狭い」と作家の埴谷雄高が書いていたのを思い出す。現実には政治の幅を超えて、先をゆく。それは仕方ないとして、膨張し疾走する現実に、今の政治はあまりに狭くて鈍すぎないか。与野党そろっての迷走が歯がゆさに輪をかける。

どっちもどっち。選挙で将来を託したいのに受け皿がない。そう感じる人が増えてはいないだろうか。政治家は失敗して本を書けても、世の現実は続いていく。あとに残る失望とツケを背負わされるのは、もうごめんである。

<ロナルド・ウィルソン・レーガン（1911-2004）>

アメリカ合衆国の俳優、第40代アメリカ合衆国大統領。

一期目は「レーガノミックス」に代表される大幅減税と積極的財政政策でアメリカに長期の好景気をもたらした。



前任者ジミー・カーター時代のイラン革命や、中米ニカラグアでのサンディニスタ政権成立などで、当該国の親米独裁政権を失ったことに対し、本格的な海外への武力侵攻をグレナダに対して行うなど、強いアメリカを印象づける出来事が目立った。

二期目はイラン・コントラ事件に代表される数々の政治スキャンダルに揉まれ、政権の体質に対する各方面からの厳しい批判が目立ったが「力による平和」戦略、「レーガン・ドクトリン」を打ち出して世界各地の反共主義運動を支援、ソ連の崩壊、ベルリンの壁崩壊など冷戦の平和的終結が実現した。

### 編集手帳：「政治献金」(3/4)

古歌にいわく 明日ありと思う心の仇桜（あだざくら）夜半（よわ）に嵐の吹かぬものは。明日があると思う心は、はかない花に似ている。夜半の嵐に散るかもしれないのに、と。伝承では親鸞聖人9歳当時の吟詠という。

その人の胸に描く桜がいずれ咲くのか、幻影のまま散るのかはまだ分からないが、嵐の渦中に立ったのは確かである。裏金事件の準大手ゼネコン「西松建設」から違法な政治献金を受けていた疑いで小沢一郎民主党代表の公設第1秘書が逮捕された。

麻生首相27%、小沢氏39% 本紙が今年1月の世論調査で「どちらが首相にふさわしいか」を問うた結果だが、一寸先の読めないのが政界であるらしい。

小沢氏は疑惑を否定し、民主党内からは「陰謀だ」との声も聞こえる。そんな手の込んだ陰謀を仕組めるほど知恵の回る政権ならば、定額給付金をもらう、もらわぬのゴタゴタや朦朧（もうろう）会見騒動は起きていないだろうから、陰謀説はどんなものだろう。

口の重い小沢氏は3年ほど前、代表就任の弁で「まず私が変わらねば…」と語った。差しあたり、国民に納得のいく説明が「明日の桜」を散らせぬ道である。

#### <親鸞（1173-1263）>

鎌倉時代初期の浄土真宗の宗祖。

明治9年（1876年）に明治天皇より「見真大師」の諡号を追贈されている。

法然（浄土宗開祖）を師と仰いで「真の宗教である浄土宗の教え」を継承、独自の寺院を持つ事はせず、各地に念仏道場を設けて教化する形で念仏集団が隆盛、親鸞の没後に宗旨として確立される事になる。



浄土真宗の立教開宗の年は、『教行信証（顕浄土真実教行証文類）』が完成した寛元5年（1247年）とされる。

親鸞の動向は自らについての記録を残さなかったことなどから、不明であったが、大正10年（1921年）に、西本願寺の宝物庫から、越後に住む親鸞の妻である恵信尼から京都で親鸞の身の回りの世話をした末娘の覚信尼に宛てた書状『恵信尼消息』10通が発見され明らかになった。

### 余禄：「小沢代表続投表明」(3/5)

ヘロドトスの「歴史」にカルタゴ人とリビア人の奇妙な交易の話がある。カルタゴ人はリビア人の国に着くと荷を波打ち際に置いて船に帰る。すると住民は海岸に出て商品を点検し、代金を置いて岸から遠ざかる。

カルタゴ人は再び上陸して、代金の黄金に満足ならば持ち去って取引は終わる。「沈黙交易」と呼ばれる習慣で、金品をやりとりする両者は、言葉を交わさないどころか、相手がどんな人たちかすら分からない。代金が不満な場合でも直接接触せずに、行き来を繰り返すのである。

さて現代の政治家は相手がどんな人たちかもわからぬまま大金を受け取り続けるものなのか。政治資金規正法違反容疑で秘書が逮捕された小沢一郎民主党代表の会見を聞いての疑問である。4年間で2100万円もの献金について、背景をせんさくしないと説明していたからだ。

代表は地検の捜査を「不公正」と批判し、献金に「やましいことはない」と断言した。その当否はいずれ判明しようが、政治家には正体不明の大金が次々に集まるかのような話を聞いて「そういうものか」と納得できる国民は多くはないだろう。

「政治改革」を旗印にしていた小沢氏であればこそ、ゼネコンの下心の潜む巨額献金を「浄財」と呼べるようにしたのが「改革」の成果というのでは国民も興ざめだ。検察との間でその違法性を争うのはかまわないが、その妥当性をいぶかしむ国民の視線は心底恐れてもらいたい。

政権が手の届くところまできた野党第1党の命運も、捜査の行方に委ねられる形になった代表続投の選択だ。経済の苦境が深まれば、政治の混迷もその度を加える悪循環はいつ終わるのか。

<ヘロドトス(BC 485-BC 420?)>

古代ギリシャの歴史家、「歴史の父」。ドーリア系ギリシャ人。小アジアのハリカルナッソス(現 ボドルム)生まれ。

戦争後、諸国を遍歴して『歴史』(全9巻)を著した。『歴史』の記述はギリシャ、ペルシャ、エジプトに関する見聞録。

『歴史』はヨーロッパで最も古い歴史書のひとつであり、中世ビザンティン時代のギリシャ人達もヘロドトスに倣った形式で歴史書を書いている。

現在でも古代ギリシャ、古代オリエント、古代エジプトの歴史研究の上で欠かせない書物のひとつで、「エジプトはナイルのたまもの」と言う言葉は『歴史』(巻二 五)に書かれている。

